



ねぶた祭り

津軽びとの夏



◀ ラッセラーのかけ声とともに跳ね踊るハネト(跳ね人)たち

- 企画 財団法人 振興財団
- 製作 (株)桜映画社
- 監修 日本伝統芸能研究所長 高橋秀雄
- 規格 16ミリ・カラー/34分
- 販売価格(消費税別) 16ミリ/210,000円

躍動する津軽の夏祭り

高橋秀雄

文部省選定
日本映画ペンクラブ推薦
日本紹介映画・ビデオコンクール
銀賞、外務大臣賞
文化庁優秀映画作品賞

北国の津軽でも、真夏の太陽はキラキラと照り輝き、樹陰にいても汗が頬を伝うことがある。けだるい午後が過ぎ、ようやくにして陽が沈む。一陣の風が頬を撫でる。涼しさが人を甦らせる。そして、その涼風に乗って、かすかに笛や太鼓の音が運ばれてくる。夏祭りのお囃子である。その響きに魅せられて、人の心が再び生き返る。

夏祭りは日本人の心のふるさとである。魂祭りでもある盆の季節を中心として、全国津々浦々でさまざまな夏祭りが繰り広げられる。その夏祭りの代表的なものの一つが津軽の「ねぶた祭り」である。

この祭りは、民俗学的には「ねむり流し」とか「ねぶた流し」と呼ばれる素朴な習俗行事が風流化したものとみられている。山形・福島・埼玉などにも、ナヌカヒ(旧暦七月七日)には、ネムの小枝や大豆の葉で眼をこすって川に流すと、眠気がさめたり、早起きができるとして、この素朴な行事が伝えられてきた。この時の唱えことは、ねぶたっこ流れる、豆の葉つことどまれ、であった。ねぶたは眠気であり、豆の葉は、まめに働く、にかけたものであろう。また、ネムの小枝というのも眠気にかかっているものである。

この「ねむり流し」は、祓えのために穢れを形代につけて流す神送りの行事が、夏の睡魔を追い払う行事として定着し、これに盆行事や神祭りの火の信仰が習合し、祓えによる「生まれ浄まり」の祭りとなっていたのである。

暗夜に極彩色のねぶたが浮かび上がり、笛・太鼓の囃子に合わせて街中を練る。ねぶたの行列は次ぎから次ぎへと通り過ぎる。壮観である。青森のねぶたでは、ハネトの群れが跳ね踊る。

最終日には、ねぶたが海に流される。青森のねぶたでは、打ち上げられる花火の下で、ねぶたの海上運行がある。遠ざかるねぶたの船の上では、ねぶた衆が提灯を振り、囃子が別れを惜しむかのように海上をわたる。感動ということは実感する瞬間である。

夏が聞けて秋……そして津軽の冬……。

●——解説

日本の北国・東北を代表する夏祭り「ねぶた祭り」は、青森の「ねぶた」と弘前の「ねぶた」が有名だが、その他にも津軽地方を中心に、今もたくさんのねぶた祭りが行われている。その華やかな祭りの陰で、ねぶたが冬の間に早くも専門のねぶた師によって作り始められていることは、あまり知られていない。

映画は、青森ねぶたを中心に、ふだん見られないねぶた制作の様子を紹介しながら、その準備から祭りの当日まで、ほぼ一年をかけて追っていく。

東北地方に残る様々なねぶたを重ね合わせて見ていくと、その歴史の変遷を窺うことができよう。そこに「祭り」に込められてきた日本人の心の源流が浮かび上がってくる。

長く厳しい冬を耐え抜いてきた津軽の人びとにとって、年に一度のエネルギーの爆発ともいえる、夏のねぶた祭り。作品は、北国の民衆の中で連綿と受け継がれてきた、この祭りの起源と民俗のここを探っていく。

●——青森ねぶたの制作過程

一月、ねぶた師の家ではねぶたの制作が始まります。構想と題材が決まると、まず下絵が描かれます(1)。顔や手足などの細かい部分は、あらかじめ針金をたこ糸で縛って作っておきます。

五月、青森港の一画に大きなねぶた小屋が立ち、本格的な制作が始まります。まず骨組みを作り、それが終わると電気の配線。紙貼りは女たちの仕事です(2)。

六月に入ると、ねぶた師によって墨書き(3)、口ウ書き、色づけと作業が続きます。昔のねぶたは、浮世絵師が作った絵本を手本にして、津軽の風絵師が描いていました。

完成したねぶたが小屋から運び出され台に乗ります(4)。

祭りの初日を待つばかりです。



1



2



3



4

●取材協力

ねぶた師・権元鴻生

千葉作龍ほか

ねぶたの唄・沢田長吉郎

青森県立郷土館

弘前市立博物館

棟方板画美術館

青森市の皆さん

弘前市・五所川原市・

黒石市の皆さん

横手市・湯沢市の皆さん

鹿角市・能代市の皆さん

[製作スタッフ]

製作＝村山和雄

脚本・演出＝村山正実

撮影＝村山和雄

山屋恵司

木村光男

照明＝本橋俊男

録音＝堀内戦治

編集＝沼崎梅子

選曲＝山崎 宏

語り＝米倉吉加年

〈民俗芸能の心〉シリーズ

企画：(財)ポーラ伝統文化振興財団/製作：(株)桜映画社/監修：日本伝統芸能研究所長・高橋秀雄

舞うがごとく翔ぶがごとく——奥三河の花祭——

16ミリ・カラー・34分/210,000円(消費税別)



天龍川の上流・愛知県奥三河地方に、村人の平安と繁栄を願って伝承されてきた「花祭」を記録した。夜を徹して、神々とともに舞い踊る人々の熱気と興奮を伝え、大自然の眩きに耳を傾けてきた日本人の心を描く。

秩父の夜祭り——山波の音が聞こえる——

16ミリ・カラー・34分/210,000円(消費税別)



近代化の波と風化をまぬがれて、秩父盆地の村々に残されてきた多くの祭りや行事を紹介する。そして一年の集大成ともいえるべき「秩父夜祭」を通して、人々の生活に根づいた祭りの持つ意味を考える。

●製作

株式会社 桜映画社

〒151 東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル
TEL 03(3320)6311(代) FAX 03(3320)7666